No.540
2019.9.17

KINZOKU DANCHI NEWS Since1974

金属団地ニュース

岐阜県金属工業団地協同組合

金属団地ゴルフ談義

山本隆一

金属団地のゴルフ会は、昭和41年に第1期が発足した。初代会長は常盤工業の先々代社長山内清次さん、幹事は常盤電機の先代社長林健三さん、会計は中部アルミの齋田光夫さんである。当時はゴルフをする人はエリートで少数派ですが、何せ会員は錚々たる大社長ばかりだから、それらの人達が何か発言するとゴルフをやっていない人々は小さくなっていたのが実情だったのである。つまり、アンチゴルフの面々は、ゴルフ会の面々の横柄な態度に対する怒りを胸に秘め、「クソッ !」と思っている人も大勢いたのである。ある時、ゴルフ会から「ゴルフ会を組合の組織に組み入れてほしい」との要望が出されたがアンチゴルフの面々からは「任意の組織に組合の費用を充てるのはまかりならぬ」と一蹴されてしまったこともあった。表面は穏やかでも心のうちは結構に鬱憤を持った人も多く、いずれどこかで両者のサヤ当てが表面化するであろうと思っていた矢先、ついにその大事件が発生したのである。

時は昭和45年、組合員親睦旅行で有馬温泉・六甲へ行った時のことである。それまでの親睦旅行は研修旅行と云い、一種の勉強会であるから組合員は全員参加である。初日はホテルへ講師を招き講演会を開いて受講し、翌日に観光組とゴルフ組に分かれて親睦をするのであるが、当時のゴルフ組は全員がゴルフ会の会員であるからお互いになあなあの雰囲気で他の人のことはあまり気にかけない横着なところもあったのである。両者とも一日の日程を終えたら集合場所へ時間を打ち合わせて集合するようになっていたのだが、観光組の方は集合時間通りに集合場所へ到着したのであるが、ゴルフ組はまだやってこない。30分が経過した頃はまだ穏やかだったが、1時間が経過した頃には観光バスの中では不満の声がちらほら出はじめた。さらに1時間半が経っても、2時間が経ってもゴルフ組が現れないので観光バスの中は騒然としはじめた。誰もが口々に文句を言いはじめゴルフ組非難のオンパレードとなったのである。特にその急先鋒は伊藤製作所の先々代社長伊藤寅雄さん、洞田工業の先々代社長洞田満さんである。私もその頃はまだゴルフをやっていなかったので観光組だったが、その若造のくせにアンチゴルフの発言を声高にわめいていたのである。雲の上のような人々をコキおろすなんて機会は滅多にないし、付和雷同で提灯つけるのも結構に楽しいものである。そんな時、観光バスの中が充分盛り上がったところでゴルフ組が帰って来た。開口一番、「お前らは何様だと思っとるんだ!」「俺たちをここまで待たせやがって、それでも人間かっ !」「お前らの顔なんぞ見たくない、消え失せろ!」。観光バスの連中は口々に罵声一色。「みんなで騒げば恐くない」方式のストレス解消論法である。ゴルフ組はあまりにも険悪なムードに言葉もなく、小さな声で「スイません」「スイません」を繰り返すのみ。あれだけ威勢のよかったゴルフ組も平身低頭、ただただ嵐の過ぎ去るのを待つのみだったのである。ようやく観光組の罵りが一段落し、帰りのバスは誰も言葉を発することなく、金属団地へ帰り着いたのであった。しかし、この時の事件はその後の金属団地に大きな変革をもたらした。翌年の組合員親睦旅行からは観光一本のみとし、ゴルフは組み入れないこととなった。この時を境にゴルフ会は独自にゴルフ会だけで遠征旅行に行くようになった。こんな状態が20年間も続いて、ようやく平成の時代に入って昔のうるさ型の社長さんたちも現役を引退し、「もうよかろう」ということになって、その後は再び組合員親睦旅行も観光組とゴルフ組との組み合わせで実施されるようになったのである。それでもあの時のトラウマは現在でも続いており、ゴルフ組は必ず先に待ち合わせ場所に来て観光組が到着するのを待つのである。観光組は殿様みたいなもので、ゴルフ組が観光組を

お出迎えするような形、これが現在でも続いているのである。何せ観光組を怒らせたらとんでもないことになるとの認識が今でも組合員の頭の中に遺伝子として浸透しているのである。こうゆう歴史があったことを現在の組合員の方々は知らないから、何でこうなっているのかを知ることは、あながち無駄なことではないと思い一筆啓上した次第。こんな事件があったから現在の暗黙のルールが出来上がった。まあそんなところです。

金属団地遠征ゴルフ2019

第53期637回開催の歴史を持つ「金属団地ゴルフ会」。例会（競技会）は毎月1回、遠征ゴルフは参加者が8名以上の場合は一泊で年1回行っています。今年は去る7月13日（土）から2日間、長野県にて遠征ゴルフが開催されました。

車4台で乗り合わせ岐阜を6時に出発。200km程度の行程ですがワイワイガヤガヤ久しぶりに楽しい車内（笑）　9時過ぎには無事諏訪カントリークラブに到着しました。山の上のゴルフ場の為、距離は短いですがグリーンが硬くて苦労しました。諏訪湖を見下ろせるロケーションのホールもあり景色は最高です。微妙な空模様でしたが降られたのは最終3ホールのみで何とか回る事ができました。

ゴルフ終了後は「ばんや」という地元密着の居酒屋にて懇親会並びに表彰式を行いました。地元料理を中心に安くておいしいお店で接客態度も良く笑顔でサービス満点！サプライズで林宏守さんのバースデー祝いも行いました。ゴルフの優勝は林宏守さん、ベスグロは小栗國男さんとなりました。また金属団地ゴルフ会の運営規約の問題点について意見交換をおこないました。

二日目は飯田カントリー倶楽部にて執り行う予定でしたが、先日からの大雨の為ゴルフは中止として観光に変更しました。先ずは飯田インターで下車し昼神温泉へ。ちょうど良い湯加減で露天風呂も気持ち良かったです。昼食は恵那の「山彦本店」に移動し美味しい鰻をいただいて帰ってきました。

また、7月26日（金）のハンディキャップ委員会において第54期8月度例会よりハンデ制からダブルペリア方式（トリプルカット）に集計方法が変更される事になりました。ドラコン賞も復活します！優勝は1人1回／年ですが優勝資格者不在の例会については2回目まで優勝を認めることとなりました。

その後8月25日（土）に第53期取り切り戦が開催され、ＭＴＫ（株）の松原伸五さんが優勝！今期の幹事、よろしくお願い致します（笑）

プライド

令和になり４ヶ月、この短い間に、日本と韓国との関係が大きく悪化した。例の3品目の輸出管理強化からはじまり、ホワイト国の除外、それに対する韓国側からのホワイト国除外、不買運動、日本製品の排除。そしてとうとう軍事情報包括保護協定の破棄にまで至ってしまった。今後、北朝鮮、中国、ロシアを絡めどのような動きに発展していくのか、予断を許さない状況である。

政府がこれほどまでの韓国側の反発、対抗を予想していたのかどうかは分からないが、個人的には、少しは韓国側も改めてくるのではないかと思っていた。

私は、今回の問題の解決策は、本音で言うなら下記が解決策と考える。

・応募工（いわゆる徴用工）の賠償は韓国政府が支払う。

元々日本が個人に賠償すると言ったら、韓国政府が我々から払うから、その金を渡せと言ったんだし・・・ていうかそもそも応募工だったんでしょう？

・世界中から慰安婦像を撤去する。

20万人もの女性を日本軍が強制連行し慰安婦とした、という日本のＡ新聞の捏造記事による誤解でしょ。もっとしっかり責任もって訂正しろよＡ新聞！

・レーダー照射を認めて謝罪をする。

本当は北朝鮮とのまずいところを哨戒機に見られるから、追っ払うために照射したけどそんなことは言えないから、兵士が間違って照射したとして謝罪すればよいのでは。二転三転して哨戒機の低空飛行のせいだ、とのすり替えは通りません。

・旭日旗を自衛隊旗として尊重すること。

これつい最近になって因縁をつけ始めたことでしょう。昔から言ってなかったよね。何がきっかけ？　Ａ新聞のマークにはクレーム付けないのは何故なんだろう。

・竹島からの退去

ここは日本の領土です。当然ですが立ち退いてください。

・輸入した戦略物資の管理強化

これが日本側の建前です。でもとても重要なことです。

まだ他にもあるかもしれないが、すべて韓国側が対応することでありながら、何ひとつやろうとせず、ただ反発、抗議、対抗するだけである。とてもプライドが高い民族なのである。

韓国は植民地ではなく、併合により日本と一緒の国になった。日本からの巨額の投資を受け、社会インフラも整備され、教育水準も生活水準も向上した。そして一緒に西洋との人種開放戦争を戦った戦友であった。しかし日本が負けたとたんに韓国は戦勝国側につき、被害者を主張する。日本は戦後WGIP（ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム）により、戦争の罪悪感を心に植え付けられてきたため、その罪悪感から韓国の要求にはなんでもハイハイと聞き入れてきてしまった。今、急にノー！と言ったら逆上するのは当たり前なのかもしれない。

でも本当は、朝鮮民族は被害者などではなく、日本と共に西洋と戦い、アジアの国々の独立を勝ち取った英雄であるのだ！

こんなところで、プライドを満足させていただけないでしょうか？

金　文安

市長との意見交換会・懇親会を開催

去る8月27日（火）、2回目となる「各務原市長との意見交換会」を開催しました。今回も3部制とし、第1部では青年部メンバーの工場見学、第2部では意見交換会、そして第3部では懇親会という設えです。前回は工場見学、意見交換会ともに時間が足りなかったため、工場見学を1社40分に、意見交換会を前回のほぼ倍の85分に伸ばしました。

行政からは前回もご参加頂いた浅野市長様、商工振興課の前田課長様、企業人材全力応援室の長屋室長様、小栗係長様に加え、4月に新たに産業政策室長に就かれた片桐室長様、伊藤主事様をお招きしての開催となりました。

工場見学では三星工業（株）を見学して頂きました。岩井社長のアテンドのもと、実際に巨大な鉄骨の製作現場を見ながら、現在の業界状況などに加え、人材や投資に関してもたくさんの質問が出、特に今回は産業政策室長様にもご参加頂いたこともあり、行政のモノづくりに対するひとかたならぬ思いに触れることが出来ました。

見学後は組合研修センターに場所を移し意見交換会が行われました。大野会長の挨拶から始まり、青年部企業の紹介もそこそこに、浅野市長ご本人から市の財政状況や各務原市の3つの基本理念に基づいた具体的活動事例などをご紹介いただき、最後に我々青年部にこれまで以上にフレキシブルな働き方を考え、実践してほしいという依頼を頂きました。

その後、①人材関連　②補助金関連　③青年部としての要望　④その他と4つのテーマを設けて質疑応答を行いました。青年部メンバーには事前に4つのテーマに関し各自の思いや質問を出してもらい、取り纏めた質問票は行政側に送ってありました。しかしやはり人材関連では質問が白熱し、かなりの時間を取ることとなったのは言うまでもありません。我々個別企業の取組みはもちろん、他の組合の「組合が中心となった」活動事例などもお話しいただき、「個」だけではなく「集」の力の活用のご提言を頂きました。青年部として様々な取り組みを考え、親組合に提案できると良いと思います。

懇親会では焼肉大翔に移り、お酒も入りながら意見交換会の続きが行われました。浅野市長や行政幹部の方々との懇談は、第2部とはまた違った雰囲気での意見交換ができ、より本音のお話もできたのではないでしょうか。青年部メンバーも当初の緊張もよそに、行政の方のとてもフレンドリーで温かいご対応のおかげで楽しい時間を過ごさせていただきました。

各務原市は工業出荷額において岐阜県内では2位の大垣市に大きく差をつけての1位だということです。今回の意見交換会の結びとして、我々金属団地組合企業も県内有数のモノづくり集団として、しっかりと各務原市を支えていくことを浅野市長に約束させていただきました。

読む茶道！ ⑦

ちょっとお堅いイメージを持つ「茶道」。
しかし、歴史をたどると人の生活に密着して育った文化であり、本来、もっと気楽に楽しんでよいものであるという人もいるくらい。「茶道を習いにいくのはちょっと･･･」と、思ってしまう人にまずは「気軽に読んで楽しんでもらおう」と思って寄稿しました。
「茶を嗜む」習慣は平安時代の遣唐使によってもたらされたと言われています。当時は今と違って「茶は薬」として考えられたので庶民には広がりませんでした。鎌倉時代になって臨済宗を伝えた栄西によって茶の栽培が始まり飲茶の効能が禅の教えと一緒に広がったと言われています。当時の記録によると時の将軍様に「二日酔いの薬」として抹茶を奨めたとも。面白いですね。もしそんな習慣が続いていたら、「今日は二日酔いだから茶道教室行って来るわ」なんて身近な存在になっていたかもしれません。（笑）
次回は「茶湯文化は賭け事として広まった！？」を紹介します。

10月に気軽なお茶教室開催します！

場所：金属工業団地組合会館「梅園茶屋」
日時：10月24日（木）19時～20時
参加費：1,000円（お抹茶・和菓子付き）
お問い合わせ：
「梅園茶屋」
TEL　058-383-7151　FAX　058-383-7131
E-mail：umezonojaya@carrot.ocn.ne.jp

日経新聞でも取り上げられた「どら焼き」で有名な「梅園茶屋」から今日ご紹介するのは「栗を使った秋のお菓子」！

栗きんとん

当店自慢の栗きんとん。栗を丸ごと使用して素材の持ち味をそのまま生かした自然な甘みが特徴です。栗をぎゅっと凝縮し、滑らかな舌触りが大人気です！数に限りがございます。季節限定の生菓子、是非ご堪能ください！

ご注文はこちらへ！

「梅園茶屋」（金属工業団地組合会館内）
TEL 058-383-7151
FAX 058-383-7131
E-mail：umezonojaya@carrot.ocn.ne.jp

8月度月例会開催

8月26日（月）の正午より、組合研修センター 3階集会室において、8月度月例会が開催されました。今回は『事業継承の様々なかたち』をテーマに、岐阜県事業引継ぎ支援センター　統括責任者　子安史彦氏を講師にお迎えし、事業継承の実情と後継者不足による事業継承ができない場合の手段としてのM＆Aとその事例についてお話しいただきました。

社長就任のご挨拶

株式会社 三機　　木 島 正 人

平素は金属団地の皆様には大変お世話になり誠に有難うございます。

この度、（株）三機の代表取締役社長に就任いたしました木島正人です。

当社は終戦3年後の1948年に名古屋市内で創業し、昨年70周年を迎えました。本年2月に新本社が完成し、新たな一歩を踏み出しております。世界情勢が大きく変化し経営の舵取りが難しくなってきておりますが、創意工夫をもって新しい製品つくりに挑戦し、お客様のお役に立つことにより、ものづくりに貢献していきたいと考えております。

今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

※7月22日発行の金属団地ニュース第538号でご報告のみ載せてあります。

R2“新規高卒獲得”のために　その4

自社の“認知度”を高め、応募に繋げるためには？　その2

先月号では、高校教員に対して自社の“認知度”を高めるための周知活動について述べさせて頂きました。今月は、高校生や大学生などの就活中の若者に対して自社の認知度を高める周知活動について述べさせて頂きます。

■高校生に自社の“認知度”を高めるためには？

岐阜工高の機械系2年生118名を対象とした進路意識調査結果では、市内の企業について、企業名・所在地・仕事内容等について“ほとんど知らない”と回答した生徒が107名（90.7％）でした。この傾向は、岐阜工高だけではなく、他の専門高校でも同様の結果になると思います。その要因は、専門高校の生徒であっても在学中に企業を見学する機会は、①インターンシップ１社、②学校行事の企業見学で3，4社の合計数社程度といった現状にあります。この他に生徒が企業について知る機会は、3年生の6月頃に学校で行われる「先輩と語る会」にて1，2社のOB社員から話を聞くことです。

高校生たちは、このように非常に乏しい企業情報の中で、前年度に来ている“求人票”を検索しながら、自分に合った企業を探し、6月中旬の進路希望調査で第3希望までの企業名を挙げています。

この進路決定の流れについては、企業人材全力応援室より市内企業等の皆様に提供させて頂いております「高校生の受験企業決定までの“流れ”と“攻略”ポイント」をご参照ください。

高校生の就職活動は“一人一社主義”のため、大学生のように事前に個人で多くの企業訪問を行うことができません。「応募前見学」（7月下旬～ 8月下旬）も受験先企業が決定した後に、ひとり1社のみに許可されるのが新規高卒採用の仕組みです。

このような求人活動の仕組みの中で、高校生に“自社の認知度”を高めるにはどうしたらよいのかについて述べさせて頂きます。

1）インターンシップの受け入れ

多くの専門高校では、2年生を対象にインターンシップを行っています。時期は夏休み、期間は3日間というのが一般的です。3日間にわたって従業員を高校生につけて面倒を見なければならないため、受け入れ企業にとっては大きな負担になりますが、インターンシップの受け入れには、企業にとって次のようなメリットがあります。

①生徒に直接対応ができ、生徒を通して学校の様子を知ることができます。

企業が直接高校生個人に接触できる機会はインターンシップ以外には全くありません。（アルバイトの機会があれば別ですが）インターンシップは、生徒個人に対して直接企業情報を提供し、自社の認知度をアップすることができる貴重な機会です。

②学校（教員）とのパイプができます。

学科主任や学科教員、若しくは担任が、生徒の様子をみるために企業訪問をします。この際に、教員に企業の説明や見学を行うことにより、企業の認知度を高めることができます。また、インターンシップの打ち合わせや報告会等で学校を訪問する機会も増えます。インターンシップ受け入れ企業を「生徒研究発表会」や「学校祭（文化祭）」に招待する高校もあります。このように、インターンシップの受け入れにより、相互訪問の機会が多くなり、求人ターゲット校の教員と情報交換をする機会や、生徒の活動に直接触れる機会が飛躍的に多くなります。

③次年度以降の採用につながる可能性が高くなります。

最近の傾向として、2年生でインターンシップを体験した企業を受験先企業として選択する生徒が増えてきています。このためには、企業側にもインターンシップを受け入れた生徒への自社のイメージアップ（この会社で働きたい、と思わせること）と情報提供継続の努力も重要になります。「インターンシップを受け入れても就職に繋がらない。」との声をお聞きすることがありますが、インターンシップが入社に繋がっている成功事例も多くあります。今まで“なぜ入社に至らなかったのか”を検証して内容を改善し、入社に繋げるインターンシップを実施して頂ければと思います。入社に至らないのには“必ず理由”があるはずです。

④１人の生徒の受け入れが、多くの生徒への企業情報伝達になります。

どの高校でも、インターンシップ終了後にレポートの提出や体験報告会を実施しています。

一人の生徒に伝達した企業情報が、多くの生徒や教員に伝わる絶好の機会です。自社について広く周知を図るためにインターンシップを活用しない手はないと思います。

２）企業見学の受け入れ

岐阜県の人口は、昨年の9月に200万人を切り、令和元年6月1日現在では1,991,390人で前月差は928人の減少となっています。人口減少には、①自然減（出生者数と死亡者数との差）と②社会減（転出者と転入者との差）がありますが、岐阜県では社会減（転出による人口減少）が大きく、転出理由の第

1位は“就職による他県への転出”となっています。有効求人倍率は愛知県（令和元年6月：2.00倍・全国第5位）より岐阜県（同月：2.08倍・全国第4位）の方が高いのに、愛知県等への就職による人口流出に歯止めがかかっていない状況となっています。

岐阜県教育委員会では、高校生の県内企業への就職促進や、大学進学後の県内企業へのUターン就職を促進する施策のひとつとして、今年度から『清流の国ぎふふるさと魅力体験事業』を実施しています。この事業は、岐阜県教育委員会が平成31年3月に策定した第３次岐阜県教育ビジョンのなかの、「ぎふへの愛着をもち、世界に視野を広げ活躍する人材の育成」という基本方針のひとつを具現化するための事業で、ふるさと岐阜を学ぶ“ふるさと教育の充実”をその目標に掲げています。具体的には、小・中・高等学校・特別支援学校の全ての校種において、岐阜県が誇る自然・歴史・文化・産業等に関する施設・史跡等で行う体験活動の機会を創出し、岐阜県の魅力を新たに発見したり、見識を広げたりすることを通して、「ふるさと岐阜」への誇りと愛着を強くもち、心豊かでたくましい子どもを育む教育の一層の推進を図るというものです。

この事業により、63校の県立高校及び19校の県立特別支援学校のすべての学校が3年間で1回の事業指定を受け、県内の自然、歴史、文化等に関する施設・環境を見学をすることになります。特に、「清流の国ぎふ」創生総合戦略の中で、「地域や企業等と連携したふるさと教育の展開」が掲げられており、県立高校の多くが地域企業の見学を企画しています。

各務原市にも、岐阜かかみがはら航空宇宙博物館や河川環境楽園の見学とセットで市内企業を見学したいとの依頼が複数入っています。各高校からの要望には極力前向きで応えていきたいと思っていますので、金属団地の企業の皆様にも、高校等から企業見学の問い合わせがあった際には、是非、ご協力くださいますようお願いします。高校生に自社に足を運んでもらい、実際に現場を見てもらうことが自社を認知させるうえで一番重要な事だと思います。

３）スマホを活用した企業情報の発信

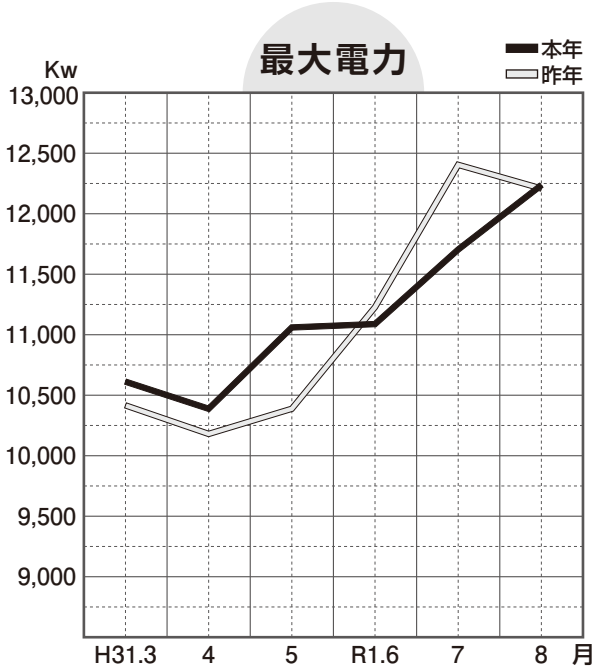
企業人材全力応援室が今年度、市近隣の4工業高校で実施した「保護者向けセミナー」で、講師の（株）名大社山田哲也社長から、「今の若者は、スマホを1日に150回、177分、1回あたり1分11秒みている。」、「3年前は名大社の企業説明会の広報はパソコンのホームページで行っていた。昨年はパソコンとスマホが半々、今年は100％スマホで行っている。」とのお話がありました。また、今の高校生や大学生の情報収集手段はスマホです。スマホ対応のホームページ作成は、企業情報を若者に周知するためには、今や必須です。「1分11秒の企業PRの動画を作成して、ユーチューブにどんどんアップしましょう」、ともお話されていました。SNSを活用した企業情報の発信では、情報更新を頻繁に行い常に最新の情報を提供することが重要だとも話されていました。

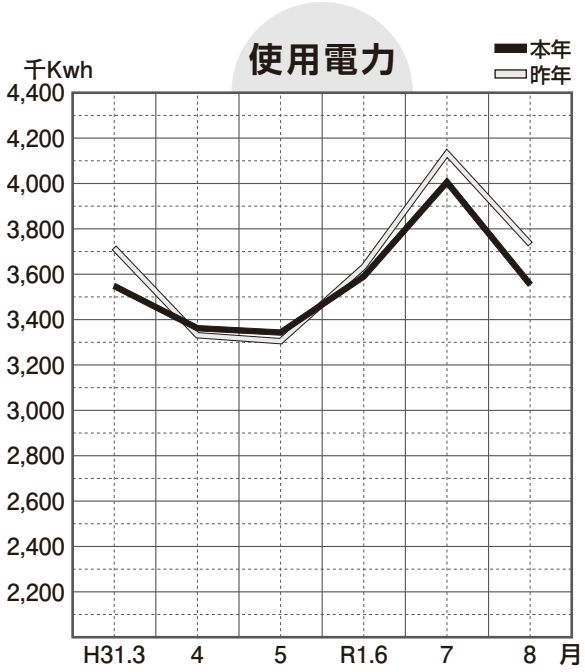
最近、テレビで、愛知県の大手BtoB企業のCMをよく目にします。テレビのCMには多額の経費が掛かりますが、スマホでの情報発信には時間や経費もそんなには掛かりません。若手社員にブログやツイッターで自社の情報発信をしてもらうのも、就活中の若者に自社情報を届ける有効な手段ではないでしょうか。企業ではカイゼンや品質管理活動の一つとして“社員カイゼン提案制度”が行われていましたが、今の時代に“スマホによる社員情報発信制度”があってもいいのかな、と思います。

今、若者の就職先を決めるのに大きな役割を果たしているのが“母親”です。母親や地域の不特定多数の人たちに企業を認知してもらうにはどうしたらいいのか？これも課題の一つです。次回は、このことについて述べさせて頂く予定です。

（文責：各務原市産業活力部商工振興課企業人材全力応援室長　長屋千秋）

令和元年８月分電力使用状況





電気は正しく使いましょう!!

波及事故について

自家用電気工作物で地絡、短絡、過負荷などの事故が発生した場合、通常は「主遮断装置」が瞬時に事故を検出して動作し、電気を遮断します。これによって事故の起きた区域を切り離すことで、影響が周囲に及ばないようにしています。

しかし、何らかの理由で自家用電気工作物の主遮断装置で遮断ができなかった場合、より上位の遮断装置である配電用変電所の遮断装置が動作します。すると、事故のあった施設がつながっている配電線が電力系統から切り離され、その配電線で電力供給を受けている一帯の需要家すべてが停電することになります。これが「波及事故」です。

自家用電気工作物の主遮断装置で遮断ができない原因としては、①検出できない範囲で事故が起きた、②主遮断装置が故障していたことが考えられます。

お客様の責任範囲で起きた事故が原因で周囲に停電を起こすため、場合によっては巨額の損害賠償などを求められるおそれがあります。

行事予定

2019 9 September

16 月	『敬老の日』
17 火	月例会
18 水	
19 木	
20 金	住宅C棟貯水槽清掃（美装モリタ商会） 消防訓練
21 土	『組合休日』
22 日	
23 月	『秋分の日』
24 火	組合事務局スキルアップ講座（岐阜県中小企業団体中央会）
25 水	役員会
26 木	青年部情報交換会
27 金	幹部研修会（岐阜南法人会）
28 土	団地G 『組合休日』
29 日	
30 月	

2019 10 October

1 火	衛生大会
2 水	
3 木	
4 金	組合員親睦旅行（～5日）
5 土	『組合休日』
6 日	
7 月	
8 火	新入社員フォローアップ研修（～9日）
9 水	
10 木	
11 金	
12 土	『組合休日』
13 日	
14 月	『体育の日』
15 火	

■ 10・11月の行事予定

10月20日日 金属団地内停電（9:00～17:00）　10月26日土 団地G　10月28日月 役員会
10月30日水 代表者会議　11月18日月 三組合合同講演会（月例会）

■ 8月度金属団地ゴルフ会

8月24日土　岐阜関カントリー倶楽部
優勝　松原伸五（MTK）　２位　鈴木純一（豊菱製作所）　３位　小栗國男（信栄ゴム工業）

G-MECCA

GIFU METAL ENGINEERING COMMUNITY COOPERATIVE ASSOCIATION

http://www.g-mecca.jp